

一八五七年恐慌

三宅義夫

この表題はよりくわしくは、前稿「一八七〇年代およびそれ以後の恐慌についてのマルクス、エンゲルスの見解」と同様に「一八五〇年恐慌についてのマルクス、エンゲルスの見解」と記されるべきものであるが、かたんに上のように記しておく。なお「一八五七年恐慌」といつても、この恐慌にいたる過程において兩人がイギリス経済の動きについてどのように観察し、どのように考えていたか、ということを追ってゆく部分がかなりの部分を占める。前々稿「一八四七年恐慌」の場合とちがって、一八五七年恐慌にいたる過程においては兩人は多くのことを書きしめているのであって、この点他の恐慌のさいよりもこの期の材料ははるかに豊富に遺されている。現実の恐慌についての兩人の見解を見るには、兩人のこうした考察過程をくわしく辿ってみることが肝要だと思われるので、本稿では逐一これを採り上げてゆくこととする。したがって、前二稿よりもこの「一八五七年恐慌」では、これを読む人にとつてある意味では一層の忍耐が必要とされるであろう。なお、この時期は、一八四九年末マルクス、エンゲルスがロンドンに亡命してきたときから、マルクスにおいては、以来経済学の研究をふたたびあらたにはじめて、著書『経済学批判』を刊行するにいたった頃までに当る。エンゲルスは一八五〇年十一月マンチェスターに移り、——以来約二十年間——父の紡績商会のマンチェスター支店の事務に携わっていた。

—

マルクス、エンゲルスは『新ライン新聞——政治経済評論 (Neue Rheinische Zeitung, Politisch-ökonomische Re-

vue)』一八五〇年第二冊(二月号)の「評論(Revue)」欄¹⁾(これには一八五〇年一月三十一日の日付が附されている)のなかで、イギリスの経済情勢についてつぎのように述べている。

(1) この『新ライン新聞—政治経済評論』については筆者稿「一八四七年恐慌」参照。「評論」欄は第一冊では「目次」のなかには記されているが、実際にはのらなかつた、——合冊復刻版、Berlin, 1955, S. 70 参照。したがってこの第二冊のものが最初のものである。第三冊用の「評論」は第四冊にのせられており、あと第五、六合併冊に長いものがのせられている。『新ライン新聞—政治経済評論』はこの第五、第六合併冊で廃刊となつたので、「評論」として存するものは都合この三つである。これらの「評論」には署名がないが、マルクス、エンゲルスの共同執筆にかかると見られる。

「大陸が最近二年間、革命や反革命、およびこれにつきものの長広舌をこととしていた間、工業的なイギリスはまったく別の商品を、すなわち繁栄を、取扱っていた。ここでは、一八四五年の秋に順を追って(in due course)勃発した商業恐慌は、二度——一八四六年のはじめに議会による自由貿易の決定と一八四八年のはじめに二月革命によって——中断された。²⁾ 海外諸市場を圧迫していた大量の商品はこの間に徐々に販路を見出した。二月革命はその上、まさにこれらの諸市場において大陸工業の競争をとり除いた。そして他方、イギリス工業は攪乱された大陸市場を失ったが、そこで失ったものは、恐慌がさらに長びけばもともと失ったであろうものよりは多くはなかった。一時は大陸工業をほとんどまったく停止させた二月革命は、かくてイギリス人がかなりらくらくと恐慌の一年を切抜けるのを助け、堆積された在庫品を海外諸市場で売りつくすのに大いに役立ち、一八四九年春に伴った工業のあらたな昂揚(Aufschwung)を可能にした。この昂揚——これはこのほか大陸工業の大部分にも拡まっていた——は最近三カ月には、工場主たちが、これまでこれほどよい時代に出合つたことがない、と云っている程度に達した。——こういったことはいつでも恐慌の前夜にいわれるものである。工場は注文が山積し、テンポを速めて活動している。十時間法

をくぐり抜けて、あたらしい労働時間を獲得するため、あらゆる手段が採られている³⁾。工場地帯のあらゆるところにあたらしい工場が大量に建設され、旧工場は拡張されている。現金は市場に押しよせ、遊休資本は一般的利潤のモメントを利用しようとしている。割引は投機をみだし、生産に、あるいは原料取引に向けられ、そしてほとんどあらゆる商品が絶対的に増大し、その価格が相対的に騰貴している。これを要するに、イギリスは『繁栄 (Prosperität)』の全盛時を享受しており、問題であるのは、この陶醉がどれだけ長くつづくか、ということだけにすぎない」(大月書店刊『マルクス・エンゲルス選集』、第五巻、二一八—九ページ、復刻版、S. 119)。

つづいてつぎのように述べている。——「いずれにしても、非常に長いということはないであろう。大市場の多くは、たとえば東インドは、すでにほとんど供給過剰になっている (sind überführt)。輸出はすでにいまでは、そこから諸商品がもっとも有利な市場に向けて送り出されうるところの世界貿易の保税倉庫の方を、現実の大きな諸市場よりも愛顧している。従来の一八四三—四五年のイギリス工業の生産力は、一八四六、四七年、とくに一八四九年にさらに一そう追加されて巨大なものとなっており、それはなお日々増大しているので、まだ存している諸市場、とくに南北アメリカやオーストラリア市場も、まもなく同様に供給過剰となることであろう。そしてこの供給過剰 (Überführung) の最初のしらせとともに、投機にも生産にも『パニック』が同時にやってくるであろう。——多分すでに春のおわり頃か、どんなにおそくとも七月か八月には (vielleicht schon gegen Ende des Frühjahrs, spätestens im Juli oder August)。だがこの恐慌は、それが大陸における大衝突と時を同じくするにちがいない (mit großen Kollisionen... zusammenfallen muß) ため、これまでの一切とはまったく違った諸結果をもたらすであろう。従来、恐慌はいずれも、あらたな前進への、すなわち土地所有と金融ブルジョアジー (Finanzbourgeoisie) とにたいする工

業ブルジョアジーの勝利への信号であったが、こんどの恐慌は現代イギリス革命の端緒となり、この革命ではコブデン（当時イギリスで自由主義的な工業ブルジョアジーとして活動していた）がネットワーク（フランス革命当時のルイ十六世の大蔵大臣、ブルジョアジーの支持者で三部会召集を提唱した）の役割を引受けるであろう」（同上訳、二一九ページ、復刻版、S. 119-20, 「内一三宅」）。

(2) この『新ライン新聞—政治経済評論』の第一冊（一八五〇年一月号）所載のマルクスの執筆にかかる論文「一八四八—一八四九年」（のちに、この連載論文に別の一章を併せて『フランスにおける階級闘争、一八四八—一八五〇年』として刊行されたもの）のなかでは、つぎのように書かれている。——「イギリスにおける一般的な商工業恐慌……これはすでに一八四五年の秋に鉄道株投機者の大量敗北によって告げられていたのであって、一八四六年中は穀物関税の迫りつつある廃止のような一連の偶然事によってそのまま保たれたが、ついに一八四七年秋にロンドンの大きな植民地商品取扱業者たちの破産という形で輝き、それに引続いて地方銀行の支払停止、イギリスの工業地域の諸工場の閉鎖が生じた」（大月『選集』、第五卷、七—八ページ、復刻版、S. 26）。当時における一八四七年恐慌の把握の仕方——未熟さ——を窺うことができる、——筆者稿「一八四七年恐慌」参照。

(3) 「十時間法」についてはさし当り『資本論』第一部の「労働日」の章第六節、とくにその S. 296-305（インスティトゥート版）参照。

同じく『新ライン新聞—政治経済評論』一八五〇年第四冊（四月号）の「評論」欄のなかでもつぎのように書いている。

「われわれはすでに一月号（第二冊）の『評論』のなかで、恐慌の接近（Herannahen der Krisis）を指摘した。いくつもの事情がこれを促進した。最近の一八四五年の恐慌の前には、過剰な資本が鉄道投機に流出口を見出した。だが、この鉄道での過剰生産と過剰投機とは非常な程度に達したので、鉄道事業は一八四八—四九年の繁栄期中でさ

え回復せず、この種のもっとも堅実な諸会社の株式もまだ極端な低位にあるほどである。低い穀物価格と一八五〇年の收穫予想とは、同様に資本投下にとって機会を与えず、また各種の国債はリスクがあまり大きすぎるので、大規模な投機の対象となりえなかった。かくて、繁栄期の過剰な資本はその通常のはけ口 (Abzugskanäle) を閉ざされていた。それに「過剰な資本に」残されていた道はただ、すべてを工業生産を投げ込むか、あるいは植民地諸商品や工業のもっとも重要な原料である棉花と羊毛の投機に投げ込むことだけであった。このようにして、さもなくば別の方法で使用されたであろう資本の大きな部分が直接に工業に流入したので、工業生産は当然異常に急激に増大せざるをえず、そしてそれとともに、市場の過充 (Ueberfülle) したがって恐慌の勃発はいちじるしく促進されざるをえなかった」(大月『選集』、第五卷、二二九ページ、復刻版、S. 213)。

そして右に語をついでつぎのように述べている、——「すでに現在、恐慌の最初の諸徴候 (Symptome) が工業および投機のもっとも重要な部門に生じてきている。四週間前から、決定的な工業部門である木綿工業は完全に不況に陥っており (ist vollständig deprimirt)、さらにそのうちでも主要部門、とくに紡績と並級の織布とが困っている。紡糸と並級キャラコの値下がりには原棉の値下がりよりもすではるかに先走っている (Der Fall in den Preisen von Twist und ordinären Kattunen ist dem Fall in den Preisen roher Baumwolle schon weit vorausgeilt)。生産は縮小され、工場はほとんど例外なくわずかな時間しか運転していない。人々は、大陸からの春季注文によって工業活動が一時的に回復することを期待していた。だが国内市場向け、東インドやシナ向け、近東向けのもう前からの注文が大部分取消されているのに、大陸からの注文——これはいつもは二カ月ほどの仕事を与えうるものであった——は政情不安定の結果ほとんどまったく来ていないのである。——羊毛工業では、事業はいまのところはなおや

『健全』であるが、それもまもなく終りとなるだろうと推測せしめる諸徴候がこかしこに現われている。鉄生産も同様に悩んでいる。生産者たちは近い将来の値下がりを不可避と考え、相互の連合によってあまりに急激な値下がりを抑えようと努めている。工業の状態については以上にとどめ、つぎに投機に移ろう。棉花の価格は、一部は増加した新規供給と一部は工業の不況とによって、下落している。植民地諸商品も同様であって、供給は増加しているが、国内市場での消費は減少している。最近二カ月間に茶を積んだ二十五隻の船しかリヴァプールにやってこなかった。繁栄期中でさえ農耕地域の窮乏のために植民地商品の消費は低かったので、今日工業地域をも捉えている圧迫がそれだけより一層つらく感ぜられている。すでに、リヴァプールにおけるもっとも有力な植民地商社の一つがこうした打撃を受けた」(同上訳、二二九—三〇ページ、復刻版、s. 213-4、傍点—三宅)。

そして以上の分析からつぎのような展望を与えている、——「現在突入しつつある商業恐慌の諸作用は、従来はいずれのそれよりもより重大であろう (Die Wirkungen der jetzt hereinbrechenden Handelskrise werden bedeutender sein als die irgend einer früheren)。それは農耕恐慌 (Ackerbaukrise) ——これはすでにイギリスでの穀物関税の廃止とともに始まり、最近の豊作によって一層強まった——と時を同じくしている。イギリスははじめて工業恐慌と農耕恐慌とを同時に経験するのである。イギリスのこの二重の恐慌 (Doppel-Krise) は、時を同じくして迫りつつある大陸の痙攣によって、促進され、拡大され、より引火し易くなる。そして大陸の革命は、イギリスの恐慌の世界市場への反作用によって、これまでとは比較にならぬほどはつきりとした社会主義的性格をもつことになる。…… / ホイッグはもちろん恐慌の最初の犠牲となる。これまでと同様に、かれらは迫りつつある嵐が突発するやいなや、政権を失うであろう。そして今度は、かれらはダウニング街の官庁に永久の別れを告げることになる。

短命のトリー内閣がさし当りかれらのあとにやってくるかもしれないが、これの足もとの地盤は動揺し、工業家を先頭として全反対党がこれに反対して結集するであろう。……かれら「この後者」はすくなくとも議会の改革というところまで進んでゆくことを余儀なくさせられる。このことは、かれらは、その政治的支配権を——これをかれらは見放してしまうことはできない——手に入れるに当って、プロレタリアートに議会の門戸を開け、その要求を下院の日程にのせ、そしてイギリスをヨーロッパ革命に引入れるという条件の下で、それを手に入れるであろう、ということの意味する」(同上訳、二三〇—ページ、復刻版、S. 214)。

右の『新ライン新聞—政治経済評論』一八五〇年第四冊の「評論」欄のはじめにはつぎのような断り書がしるされている、「前冊ではスペースが足りないため月例評論を割愛せざるをえなかった。われわれはこの評論のなかから追加的に、イギリスに関係している部分だけをのせる」と。このことから、以上の第四冊所載のものはもと、同年三月号たる第三冊用として書かれていたものであったということを知ることができるが、以上に掲げた文のあとに、この第四冊ではつぎのような書足しがなされている(このおわりに一八五〇年四月十八日という日付がしるされている)。——

「突入しつつある商業恐慌についての一カ月前に書いた上の記事につけ加えるべきことはほとんどない。春に通例やってくる事業の一時的な改善 (momentane Besserung) は今度もうとうやってきたが、しかしいつもよりもわずかであった。主として軽目の夏向き地を製造するフランスの工業は、これでとくに儲けた。だが、マンチェスターやグラスゴーやウェスト・ライディングでも注文が増加した。しかし、春のこの工業の一時的な回復は毎年やってくるものであって、恐慌の発展はほんのわずかしこ抑えられない。——東インドでも交易の一時的な増加が見られた。イギリスに有利な事態の成行きによって、売手たちはその在庫品の一部を従来より安い価格で売却することが可能と

なった。そしてこのためボンベイ市場はいく分緩和された。こうした事業の一時的な局地的な改善も、いつの恐慌でもとくにはじめに時折生じそしてその一般的な発展の進行にはいかに足りない影響しか及ばざないところの、攪乱の出来事に属するものである。／＼これに反して、アメリカからは、その市場がまったく圧迫されていることを報じている報道が丁度着いたばかりである。だがアメリカの市場はもつとも決定的である。アメリカ市場の供給過剰とともに、アメリカにおける事業の停滞と物価の下落とともに、本来の恐慌がはじまり、イギリスへの直接の、急激な、とどめ難い反作用がはじまる。まさに一八三七年の恐慌が思い出される。……／＼アメリカが過剰生産によってひき起された後退運動に入ったことから推して、われわれは、恐慌が来月あたりはこれまでよりもやや急速に発展するだろうと予期してしかるべきであろう。大陸での政治的諸事件も、同様に日ごとにますます決着を迫っている。かくて、この評論ですでにくり返し述べてきたところの、商業恐慌と革命とが時を同じくすることが、ますます避けがたくなる」(同上訳、二二一―二二ページ、復刻版、S. 214-5)。

以上の二つの「評論」を見ると、マルクス、エンゲルスは、「一八四九年春」にイギリスの工業は「あらたな昂揚」を来たし、この第一「評論」の一八五〇年一月末には、イギリスは「繁栄」の全盛時を享受」している、しかしこの「陶醉」はそう長くはつづかないであろうとし、そういった予測の根拠として、「東インド」がすでにほとんど「供給過剰」になっていること、イギリスの生産力はきわめて増大しているので「南北アメリカやオーストラリア市場」もまもなく「供給過剰」となるであろうことを挙げている。そして第一「評論」の結論として、右の南北アメリカやオーストラリア市場の「供給過剰」のしらせとともに「パニック」がやってくる、この時期は「多分すでに春のおわり頃か、どんなにおそくとも七月か八月」であろうとし、このイギリスにおける恐慌は大陸での革命と「時を同じくする

にちがいない」と見ていた。第二「評論」でもこういう觀察ないし判断は同様であつて、「恐慌の接近」は「いくつかの事情」によつて「促進」されているとし、今回は——前の恐慌のさいとちがつて——鉄道、穀物、国債のいずれも「投機」の対象となりえないので「繁栄期の過剰な資本はその通常のはけ口を閉ざされていた」⁴⁾、かくてかかる資本は大部分「工業生産」に直接向わざるをえなく、この生産の増大によつて「恐慌の勃発」はいちじるしく促進されざるをえないと指摘し、「すでに現在」恐慌の「諸徴候」が「木綿工業」にも「羊毛工業」にも「鉄生産」にも現われている、「植民地商品」の消費も減つているとし、そして、「現在突入しつつある商業恐慌の諸作用は従来 of いずれのそれよりも重大であらう」、イギリスははじめて「工業恐慌と農耕恐慌とを同時に経験する」ことになるのであり、この「二重の恐慌」が「大陸の革命」と相互に作用、反作用を及ぼし合うのだ、という展望を与えていた。これにあとから附された四月十八日付の書加えでは、さきに、大陸からの恒例の春季の注文が今年はまったく来ていないと記していた点について、これは今度もとうとうやつてきて事業は「一時的な改善」をうけている、「東インド」でもいく分滞荷が捌けた、と告げ、しかしこうした一時的な改善はいつの恐慌のはじめにも時折生じるもので「恐慌の發展」にはほとんど影響がないと断じ、「アメリカ」から市場が過剰気味であるというしらせが入ったが、これから推してイギリスでの恐慌は「来月あたりはこれまでよりもやや急速に發展するだらう」という見透しをつけている。

(4) この「投機」と過剰生産、「恐慌」との関係については、つきに見る第三の「評論」のはじめのところで——ここは前稿「一八四七年恐慌」でも引用しておいたが——つぎのように述べている。——「一八四三—四五年は一八三七—四二年の時期のほとんど間断なき産業不況の必然的な結果たるころの工業的、商業的繁栄の年であつた。いつもと同様に、繁栄はきわめて急速に投機を展開させた。投機は通例、過剰生産がすでに完全に進行している時期にはじまる。投機は過剰生産にたいして、一時的なはけ口を提供するものであるが、他方投機はまさにこのことによつて、恐慌の突入を促進し、その力を増大させる。恐慌自

身はまず、投機の領域で爆発し、のちにいたつてはじめて生産をとらえる。それゆえ、過剰生産ではなく過剰投機——これ自身過剰生産の一徴候にすぎない——が、表面的な観察にとつては、恐慌の原因として現われる。のちに生じる生産の震撼は、それに先行したみずからの豊饒の必然的な結果としてではなく、崩壊しつつある投機のたんなる反動として、現われる」(『大月選集』、第五卷、二三四ページ、復刻版、S. 304、傍点—三宅)。

このように一八五〇年の一月—四月には、マルクス、エンゲルスは、恐慌はすでに「接近」しつつあり、この年の春のおわり頃か「どんなにおそくとも七月か八月」には来ると見て疑わなかったのである。ところが、つぎの同じく『新ライン新聞—政治経済評論』第五、六合併冊(五月—十月合併号)での「評論」になると——これには「五月—十月」という表題がつけられており、そのおわりには一八五〇年十一月一日と日付が入っている——、この見方は大きく変じているのであつて、この変化はいろいろな点で相当に注意を払われるべきものと考えられる。経済情勢にたいする観察、判断が、かんたんについて見方が、変ってきているとその結論だけをいってもあまり意味がないことであつて、それが事態のどういう観察にもとづいているかをなるべく具体的に見る必要があるので、煩をいとわずつぎにこの第三の「評論」を必要なかぎり些細に見てみよう。

なおその前に、これまでのところにおいて、とりあえずつぎのことが注意される。一つは、さきに見たように、一八四七年恐慌についてこの当時にあつては、「一八四五年の秋に順を追つて勃発した商業恐慌」と見、この商業恐慌が「一八四六年のはじめ」と「一八四八年のはじめ」の「二度」にわたつて「中断」されたと見ていることである。これは産業循環の週期についての当時の見解を窺わしめる一材料たるものである。第二は、ここで示されている見透しはそのまま実るものとはならなかつたとはいえ、二つの点にかんしては、ともかく事実上先見的であつた。一つは一八

五七年恐慌が一八四七年恐慌のいわば商業的性格とちがってとくに工業的性格をもっていたこと、一つは一八三七年恐慌のさいと同様に一八五七年恐慌においてアメリカ——一八四八年カリフォルニア金鉱発見——がまず発端となったことである。ついでにいうと、ここで「革命」といつているさい、主として大陸での革命に眼が注がれているのであるが、ここにも言及されているイギリスの政治過程についての展望は注意さるべきものを含んでいるといえよう。

二

第三の「評論」たる「五月—十月」は、「最近六カ月の政治的激動は、直接これに先立つそれとは本質的にちがっている。⁵⁾革命党はいたるところで舞台から追いやられ、勝利者は勝利の果実をめぐって互いに争っている。勝利者とは、フランスではブルジョアジーの諸分派、ドイツではいろいろな諸侯である」(傍点—三宅)という書き出しではじまり、「われわれはまず、その上でこれらの表面上の沸騰が演じられているところの直の基礎 (reale Grundlage) を観察しよう」として、まず一八四五—七年のイギリスにおける恐慌の過程について詳細な叙述を与え(この叙述については筆者稿「一八四七年恐慌」のなかでくわしく見ておいた)、そしていう、「一八四七年」十月にはすでに、大陸への恐慌の最初の反作用が現われた。ブラッセル、ハンブルグ、ブレーメン、エルベルフェルド、ジェノア、リヴォルノ、クルトレ、セント・ペテルスブルグ、リスボン、ヴェネチアで、同時にはなばだしい破産が勃発した。イギリスで恐慌の強度が減じていったのと同じ度合で、大陸では恐慌の強度が増大し、かつて達したことのなかった点にまで至った。……かくてイギリス以外での破産の数は十一月に増加した。いまや、ニューヨーク、ロツテルダム、アムステルダム、ル・アーヴル、バイヨンヌ、アントワープ、モンス、トリエスト、マドリッド、ストックホルムでも、同様に

大規模な倒産がやってきた。十二月には恐慌はマルセイユとアルジェリアでも勃発し、ドイツではあらたにはげしさがもりかえした」(大月『選集』、第五卷、二四一ページ、復刻版、S. 308、なお、この「五月―十月」の内容は大きく分けて二つにわかれ、前半はどのように経済情勢の叙述に当てられており、後半でイギリス、フランス、ドイツでのここ六ヵ月間の政治的事件を見ているのであるが、この前半部分はさきに「一八四七年恐慌」を見たいに揭げておいたように Marx/Engels, Kleine ökonomische Schriften, Bücherei des Marxismus-Leninismus, 1955 のなかにも収録されている——S. 536-61. またこの部分は改造社刊『マルクス・エンゲルス全集』においても「評論(マルクス)」―「自五月至十月」として訳出されている。――第四卷、五六七―九七ページ(このおわりの方は原文後半の一部の訳――チャーチストおよびドイツについての――を含んでいる)。本稿では前の第一、第二「評論」との連絡上、大月『選集』第五卷——といつても『選集』版のここの訳は改造社『全集』版の訳よりもよいわけではなく、ともに誤訳がすくなくない——と復刻版とのページを記しておく。

マルクス、エンゲルスは一八四七年のこうした「商業恐慌が一八四八年の革命に寄与した」ことを大きく評価しているのであって、右の一八四七年恐慌の過程を考察したのち、ついで、こんどは一八四八年、一八四九年、一八五〇年のイギリスにおける「繁栄」について考察し、また北アメリカ合衆国での情勢を見ている。アメリカでは、一八三六年に勃発した恐慌は一八四二年までつづいたが、一八四四―四五年以来繁栄となり、一八四七年の恐慌もここではほんのわずかかすめただけであつたとし、とくにカリフォルニア金鉱の発見はアメリカの繁栄に王冠をのせたものであるとして、この金鉱発見にともなつてまったくあたらしい「国際的交通路 (Welstraßen)」が必要となつたこと、ここに世界の資本の注目が集められていることを指摘している⁶⁾。そしていう、「イギリスとアメリカの繁栄はまもなくヨーロッパ大陸に反作用を及ぼした」(同上訳、二五五ページ、復刻版、S. 315)と。そしてドイツでは一八四九年末

から一般的に、フランスでも一八四九年、とくに一八五〇年以来、活況を呈してきたことを認め、つぎのような——有名な——結論を与えているのである。——「ブルジョア社会の生産諸力がブルジョアの諸関係の内部で一般に可能になかぎり発展するところの、こうした一般的繁栄のさいには、現実の革命は問題となりえない (kann von einer wirklichen Revolution keine Rede sein)。このような革命は、この二つの要素、つまり近代的な生産諸力とブルジョアの生産諸形態とが、互いに矛盾に陥る時期にだけ可能である。現在大陸の秩序党の個々の分派の代表者たちがそれに耽り、互いに困らし合っている種々の争いは、あたらしい革命をひきおこすようなものではなく、反対に、諸関係の基礎がいまのところかくもしっかりしており、かつ——このことを反動は知っていないが——きわめてブルジョア的であるからこそ、こうした争いが可能なのである。ブルジョアの発展を阻止する反動的な企てはすべて、民主主義者たちのあらゆる道徳的な憤怒やあらゆる熱狂的な諸宣言と同じように、それから諸関係の基礎から弾き返されてしまうであろう。あらたな革命はあらたな恐慌の結果としてのみ可能なのである (Eine neue Revolution ist nur möglich im Gefolge einer neuen Krisis)。だがまたそれは後者と同じようにたしかである」(同上訳、二五八—九ページ、復刻版、s. 317-8)。

いまここであらかじめ以上のことを記しておくのは、右から窺われるように、この第三「評論」は、イギリスで一八四七年恐慌からあらためて説き起こし、現在は「一般的繁栄」期にあり、こうした時期には「現実の革命は問題となりえない」としているものであって、マルクス、エンゲルスにとって一つの時期を劃する大論文をなしていることを指摘しておきたいからである。イギリスで恐慌が切迫しており、同時に大陸での革命のもし返し——勃発が間近かに迫っているという第一、第二「評論」での見方とくらべてみると、これはそれといちじるしい変化を示しているの

であつて、兩人はさきの見方からここで一応袂別しているといつてよい、——このことはのちに見るようにエンゲルス自身、後年、さきの判断は「幻想」であつたと認めている——。と同時に、現在はこのように繁栄期にあることを認めねばならない、そして「あらたな革命はあらたな恐慌の結果としてのみ可能である」、そこでこの兩人、なかなづくマルクスは、爾後「あらたな恐慌」の到来を鶴首し、その徴候が現われないかとつねに注意しこれを待望することとなった。

さし当つての前書きはこの程度にとどめ、前に見た第一、第二「評論」での記述とあまり離れないうちに、この第三「評論」でのイギリスの経済情勢についての記述を見てみよう。

(5) ここで「最近六ヵ月」といつているのは、四月に出した第四冊から五月—十月合併号として出すこの第五、六合併冊にいたる六ヵ月を指しているわけであるが、しかし「最近六ヵ月」に情勢が「本質的に」変つたというよりも、むしろ、エンゲルスが後年記しているように(『フランスにおける階級闘争』第四章の前書き)、この第三「評論」ではこの点は「一八四八年の経過中にふたたび現われ、一八四九年になお一そう高まつた商工業の繁栄が、革命的昂揚を麻痺させ、同時に反動の勝利を可能にした」ということを述べ、これを認めたものと見られるべきであらう。そしてこのことは、この第三「評論」執筆の一八五〇年の後半にいたつてイギリス経済の情勢がひきつづき繁栄期である事実が現われてきたというよりも、むしろ、マルクス、エンゲルスにとってイギリス経済の一般情勢について事態の成行きが明らかになつてきたと見られるべきである、ということと相對応することのように思われる。

(6) すでに第一「評論」でも、アメリカにおけるカリフォルニア金鉱の発見は「二月革命よりもつと重要」であるとし、「世界交通の重心は、中世ではイタリー、近世ではイギリスであつたが、いまやそれは北アメリカ半島の南半球である」と、その意義を大きく評価していたが(同上訳、二一九—二二ページ、復刻版、S. 120-1)。この第三「評論」でもこれに大きく注意を払い、「われわれはすでにこのレヴューの第二冊で〔右の第一「評論」のこと〕他のヨーロッパのあらゆる雑誌にさがけて、この発見の、ならびにその全世界貿易にたいする必然的結果の、重要性に注意を払つておいた。この重要性は、未発

見であつた鉱山による金の増加という点にあるのではない、——こうした交換手段の増加も一般的取引の上に好影響を及ぼさざるをえないとはいへ——「この判断の当否は、やや問題であらう」、その重要性は、カリフォルニアの鉱物の富が全世界市場の諸資本に与えた刺戟の点に、アメリカの全西海岸とアジアの東海岸とを捉えた活潑な動きの点に、カリフォルニアとカリフォルニアによつて影響を受けているあらゆる地方につくり出されたあたらしい販売市場の点に、ある」(同上訳、二五二ページ、復刻版、\$ 34)として「国際的交通路」が必要となつたことを述べ(なおエンゲルスはこの点について翌一八五一年七月三十日付マルクス宛の手紙のなかで、「最後のレヴューでの大洋汽船航行の大拡張についてのわれわれの予想は、すでに現在実証された」云々といつてゐる)、そして恐慌とかんれんしてつぎのような展望を与えてゐる。——「資本がこのように大洋汽船航行やアメリカの地峽の運河開鑿に向つてゐることは、すでにこの領域での過度投機をひきおこす基礎をなしている。この投機の中心は、必然的にニューヨークであつて、同地はカリフォルニアの金の大部分を受けとり、カルフォルニア向けの主要な取引をすでにその手に収めており、一般的にいって全アメリカにたいして、ロンドンがヨーロッパにたいして演じていると同じ役割を演じてゐる。……過度投機はまもなくすぐ發展するであらう。そして、イギリスの資本が大量にこの種のあらゆる企業に入り込んでも、またロンドン取引所が同じような種々様々な企画で充滿しようとも、しかし依然としてニューヨークがこのたびはいつさいの熱病の中心をなし、そして一八三六年と同じように最初にその崩壊を経験することとならう。無数の企画は瓦解するであらう。だが一八四五年のイギリスでの鉄道制度のさいと同様に、このたびは国際的汽船航行のすくなくとも輪廓が、過度投機のなから生れてくるであらう。いかに多くの会社が破産しようとも、大西洋の交通を倍化し、太平洋を打ち開らき、オーストラリア、ニュージールランド、シンガポール、シナをアメリカと結びつけ、世界をめぐる旅行の時日を四カ月に短縮するところの汽船、——この汽船はのこるであらう」(同上訳、二五四—五ページ、復刻版、\$ 35。傍点—宅)。

イギリスの経済情勢についての記述。「このあらたにやつてきた繁栄は、イギリスでは一八四八年、一八四九年、一八五〇年の三年間顕著に發展した。一月から八月までの八カ月に、イギリスの総輸出は一八四八年には三一、六三三、二一四ポンド、一八四九年には三九、二六三、三二二ポンド、一八五〇年には四三、八五一、五六八ポンドであ

った「さきには輸出は行づまりつつあると見られていたが、こでまずこう記しているように、一八月で見ると一八五〇年においても総輸出は前年につづいて増加をつづけたわけである」。鉄生産を除くあらゆる事業部門において示された、こうしたいちじるしい昂揚 (Bedeutende Hebung) につけ加えて、その上この三年間いたるところで豊作であった。一八四八—五〇年間の小麦の平均価格は、一クォーターあたりイギリスでは三六シリングに、フランスでは三二シリングに低落した。この繁栄期を特徴づけていることは、投機の三つの主要なはけ口が閉ざされていたことである「この点を指摘していることはさきと同様である」。鉄道敷設は普通の工業部門のような緩慢な発展に引き戻されていたし、穀物は豊作がつづいたのでなんの機会も与えなかったし、国債は革命のために安全性という性格——これなくしては大きな投機的有価証券取引は可能でない——を失ってしまった。繁栄期にはいつでも資本は増大する。一方では生産の増大があらたな資本をつくり出すし、他方では恐慌中休眠していた既存の資本が不活動状態からひき出されて市場に投げ込まれる。こうした追加的資本 (Dies additionelle Kapital) は一八四八—五〇年には、投機の進出が欠けていたので本来の工業に投下され、かくして生産をより一層急速に増大することを余儀なくされていた。このことがイギリスでいかにいちじるしく現われているかということは、世人はそう云っていないとしても、一八五〇年十月十九日付の『エコノミスト』の素朴な記事がこれを証明している。 / 『今日の繁栄が従来のかなる時期のそれとも本質的にちがつているということは、注目に値する。どのこうした時期にも、根柢のないなんらかの投機が、充たされるはずのない希望をかき立てた。……かかる投機が十分に根柢ある場合でさえも、それらはいちじるしく長い期間後にはじめて実現されるような収益を当てにしているのがつねであった。……だが現在、わが国の繁栄は直接に有用な物品の生産に基づいている。これらの物品は、市場に出されるとほとんどすぐに消費に入るのであり、生産者たちに適度の利得

を与え、かれらを生産増大に駆り立てる「傍点—三宅」マルクスはこのいい方が多分に氣に入つたらしく、のちに見るように二年のちの一八五二年十一月一日号の『ニューヨーク・トリビュン』の論説のなかでも、これを「ブルジョア楽観論者たち」はこゝういつてゐるとして、上に傍点を附しておいたところをふたたび掲げてゐる。——Gesammelte Schriften von Karl Marx und Friedrich Engels 1852 bis 1862, herausgegeben von N. Rjasanoff, Erster Band, zweite Aufl. S. 31. 文章自体は右に『エコノミスト』をマルクスが独訳したものであるのにたいし、リヤザノフ版のは『トリビュン』からルイゼ・カウツキーが独訳したものであるので、互いにすこし差異はあるが」(同上訳、二四三—四ページ、復刻版、S. 309-10, C. 1 内—三宅、以下同じ)。

このように一八四八—五〇年の経済の一般的状态を述べたのち、個々の部門についてつぎのように述べてゐる。——「一八四八年と四九年に工業生産の増大がいかにいちじるしかったかをもっとも適切に証拠立ててゐるものは、主要工業部門たる棉花加工である。合衆国での一八四九年の棉花の收穫は過去のどの年よりも多かった。それは二百七十五万梱、つまり約一、二〇〇百万封度にのぼった。木綿工業の拡張はこの供給増加とかわめて歩を一にしていたので、一八四九年末には「棉花の」在庫品は過去における不作の年ののちとくらべてさえもすくなかった。一八四九年には七七五百万封度以上の棉花がつむかれたが、これまでの最高の繁栄の年であつた一八四五年にも七二二百万封度が加工されたにすぎなかった。木綿工業の拡張は、さらに、一八五〇年の收穫不良がそれほど大したことではなかったのに棉花価格がいちじるしく騰貴した(五五パーセント)ことによつても証明されている。これとすくなくとも同様な発展が、他の紡糸、織布の全部門——絹、羊毛、混紡品、亜麻において見られる。これらの工業生産物の輸出はとくに一八五〇年にいちじるしく増大したので、そのため、木綿製品の輸出が一八五〇年には棉花不作のために目立って減少したにもかかわらず、同年の総輸出の著増(一—八月において一八四八年に比し一二百万ポンド、一八四九

年に比し四百万ポンドの増加) がもたらされた「さきには木綿工業は一八五〇年の三月頃生産過剰のため操短しているかのように述べられていたが、ここでは「棉花不作」のために輸出がすくなかったと述べられている」。羊毛価格のいちじるしい騰貴にもかかわらず——この騰貴はすでに一八四九年に投機によってひき起されたように見えたが、それにもかかわらず今日にいたるまで維持されている——、羊毛工業はたえず拡張をつづけており、日々あたらしい織機が運転をはじめている。亜麻布の輸出は従来その輸出がもっとも多かった一八四四年には九一百万ヤード、価額にして二、八〇〇千ポンドであったが、一八四九年にはそれは一〇八百万ヤード、三、〇〇〇千ポンド以上に達した。「これらの好調は、さきのおわりで一八五〇年にも春季注文による「一時的な改善」が生じていると記していたが、この「改善」が実は「一時的」なものではなく引きつづいたのでもあらうか。」 / イギリスの工業の成長を証明している他の一つは、主要な植民地商品、とくにコーヒー、砂糖、茶の消費が継続的に増加している——このうちすくなくともはじめの二つの商品の価格はたえず騰貴しているのであるが——ことである。これらの消費の増大は、異常な鉄道投資によってつくり出されたとところの一八四五年以来におけるこれら商品にとって異例であった市場がすでに久しく普通の規模に縮小されているだけに、また、近年穀物価格が低いので農耕地域での消費はぜんぜん増大していないだけに、それだけですす、工業拡大の直接的な結果たるものである「この「植民地商品」についてはさきには「供給は増加しているが、国内市場での消費は減少している」と述べていた」(同上訳、二四四―五ページ、復刻版、\$ 310)。ついでいう、「一八四九年の木綿工業の大拡張は、同年の最後の数カ月に、東インドとシナの市場を供給過剰にする試みをあらたにひき起した。しかし、かの地には前の、まだ売れないでいる多量の在庫品があったので、これがこの試みをじきにまもなくふたたび阻止することとなった「加うるに棉花不足が作用した?」。これと同時に、原料と植民地諸商品の消費が増加しているので、こ

これらの品目についても投機の試みがなされた。だがこれも、供給が一時的に増加したこととまだあまりに生々しい一八四七年の手傷を想い出すことによつて、じきにまもなくふたたび抑制された。「これらはいずれも、「投機」が大きく発展しえなかったことを指摘しているものである。さきに、「東インド」がほとんど「供給過剰」となつており、「東インドヤシナ向け、近東向け」の既約の注文が取消されていると述べていたのは——時期的にはすこしずれがあるが——、ここのはじめに記しているような事情と対応するものであつたのもであらうか」(同上訳、二四五ページ、復刻版、S. 310)。

そしてついでさらに、さきの「恐慌の接近」ないし「突入しつつある商業恐慌」という判断とは逆に、こうした「工業の繁栄」は「なお高められるであらう」という判断を記している。すなわち、——「工業の繁栄は、オランダの植民地が先頃開放されたことによつて、太平洋にあらたな連絡航路が開かれようとしていることによつて、また一八五一年の大産業博覧会によつて、なお高められるであらう」と(同上訳、二四六ページ、復刻版、S. 310)。またいう、——「もし、一八四八年にはじまつた工業発展のあたらしい循環が、一八四三—四七年のそれと同じ経過を辿るならば、恐慌は一八五二年に勃発するであらう。いつの恐慌にも先行するところの、過剰生産から生じる過度投機が遠からず起らざるをえない(nicht lange mehr ausbleiben kann)徴候として、ここに、イングラント銀行の割引率がここ二年來二パーセントより高くなつていないといふことを挙げよう⁷⁾。しかも、イングラント銀行が繁栄期にその利子歩合を低く保っているときは、その他の貨幣取扱業者たちはかれらの利子歩合をこれより低く下げざるをえないのであつて、それは丁度、イングラント銀行が利子歩合をいちじるしく高くする恐慌期にはかれらはイングラント銀行のそれより以上に引上げると同様である。さきに見たように繁栄期には通例追加的資本が貸付市場に投げ込まれるのであつて、この追加的資本はそれだけでも、競争の法則にしたがつて利子歩合をいちじるしく引下げるのであるが、だが、

一般的繁榮によつてはなほ大きく増大させられた信用が資本にたいする需要を減ぜしめるので、この信用によつて利子歩合はさらにずっと大きな程度で低められる。政府はこうした時期には、その長期債の利子歩合を引下げることができるし、また土地所有者はその抵当をより有利な条件で更新することができる。貸付市場の資本家たちはかくして他のすべての諸階級の所得が増加する時期に、かれらの所得は三分の一あるいはそれ以下に減少することになる。こうした状態が長くつづけばつづくほどますます、かれらはかれらの資本のより有利な投下口を探し廻る必要に迫られる。過剰生産は多くの新企画を喚び起すが、そのうちのわずかなものが成功するだけで、きわめて多くの資本をこの同じ方向に投げ込ませ、熱病をつぎからつぎへと一般化するにいたるに十分である。しかしさきに見たように、投機には現在、主要なほけ口はただ二つが可能であるにすぎない。すなわち棉花栽培（これについてはなお後掲の註（6）を見られたい」と、カリフォルニアおよびオーストラリアの発見によつて与えられた世界市場のあたらしい連絡とである。かくて、投機の戦場は、このたびは、従来などの繁榮期におけるよりもはるかに大きな拡がりをもつことになるであらう」（同上訳、二四八九ページ、復刻版、S. 312、傍点—三宅）。そしておわりに、「さらに、イギリスの農業地方の状態を一瞥しよう。ここでは、穀物関税の撤廃ならびにそれと時を同じくした豊作とのために、一般的圧迫が慢性的となっている。もっともそれは、繁榮の結果消費がいちじるしく増大したことによつて、いく分緩和されてはいるが」云々と述べている（「さきに「二重の恐慌」といつていた片方の農業恐慌の方も、さしあたり遠のいたと見られているわけである」（同上訳、二四九ページ、復刻版、S. 312-3）。

（4）金融市場が緩慢であるということからただちに「過度投機が遠からず起らざるをえない」という「徴候」を読み取ること、は、いささか気が早やすぎると思われるが、ところで、ここでマルクスはイングランド銀行の割引率が「ここ二年来二パーセ

ントより高くなつていない」と記しているのであるが、J・クラバムの『The Bank of England, vol. I, 1945, 巻末の「バンク・レート」の表によると、同行の公定割引歩合——最低率——は、一八四八年十一月—一八五〇年十二月の間では三%—二½%であり、二%に下つたのはこのあと一八五二年四月—一八五三年一月の間となっている（筆者稿「一八七〇年代およびそれ以後の恐慌についてのマルクス、エンゲルスの見解」(一)、『立教経済学研究』第十卷第二号一九ページの「バンク・レート」の表および同三ページの図参照）。いずれにしてもかなり低く下つていたことにはちがいないが。

このように、現在の繁栄はなおつづくであろうと見ると同時に、「過度投機」が「遠からず起らざるをえない」と見、一八三七—四二年の不況のあとをうけて一八四三年からはじまった繁栄、一八四七年の恐慌、といった「一八四三—四七年」の循環と同じ過程をとるならば、一八四八年からの繁栄は、同じく四年後の「一八五二年」に恐慌となるであろう、という予測を立てていたわけである。このあともしばらく長く、まだ当時の恐慌の週期について後年のようにほぼ十年という見地にはいたっていないのであるが、さきの第一「評論」で一八四〇年代の恐慌を一八四七年恐慌というように明確に捉えないで「一八四五年の秋に順を追って勃発した商業恐慌」といつていたのにくらべると、この第三「評論」では——ここでくわしく一八四七年恐慌の過程を見ているわけであるが——これを一八四七年恐慌とはっきり把握するようになってきていることが、右からも窺われる。——なお、この第三「評論」でイギリスの一八四七年恐慌の過程を見ているところではつぎのようないい方をしている。「いまや、本来の商業恐慌、金融恐慌のところに（auf die eigentliche kommerzielle, auf die Geldkrise）きた。一八四七年のはじめ四カ月間は、商工業の一般的状态はまだ満足な様相を示していた」云々（同上訳、二三七ページ、復刻版、S. 306、なお筆者稿「一八四七年恐慌」の註（12）——『立教経済学研究』第十卷第一号二八ページ、『貨幣信用論研究』二三五ページ——参照）。

なお、以上に見た木棉工業の動きについての記述に、若干つけ加えておくと、『資本論』第三部第六章「価格変動

の影響」第三節「一般的例証、一八六一—一八六五年の棉花恐慌」のところでは『工場検査官報告書 (Reports of the Inspectors of Factories etc)』からの引抄が掲げられているが、そこにはつぎのような記述が見られる。——「原料の投機とその供給見込が不確実であることのために、木綿工業では以前から、他のどの事業部門におけるよりも、より大きな興奮とより頻繁な動揺が生じた。ここでは目下比較的粗い綿製品の在庫品の堆積が生じているが、このことは小紡績業者を不安にし、すでにかれらに損失を与えているのであって、かれらのうちには操業を短縮しているものが多いほどである」(『工場検査官報告書、一八四九年十月』、一八五〇年刊。インスティテュート版、Bd. III, s. 149-50、長谷部訳、青木版二〇一ページ)。このように、「一八四九年十月」の『工場検査官報告書』も、当時この部門が過剰生産気味であったことを伝えている。そして、翌一八五〇年に入つてのこの部門での不況は、販売市場のためではなく「原料の供給不足」によつたことを告げている。すなわちつぎの「一八五〇年四月」の同『報告書』では、「ほかならぬ粗番手の糸と重織物と用の原料の供給不足のため、木綿工業の一部での大不況」を告げ、またつぎの「一八五〇年十月」の『報告書』(一八五一年刊)でも、「棉花価格はひきつづいて……この事業部門において、とくに原料が生産費の大部分をなすような銘柄にとつて、大きな庄迫をひき起しつゝ」と(Bd. III, s. 150、長谷部訳、青木版二〇一—二二ページ)。また、『資本論』のここでは——第三「評論」のさいと同様に——かかる木綿工業の不況は、一般の事業状況にたいして「例外」をなすものとされている、——「一八五〇年。四月。ひきつづき事業好調。例外」云々(Bd. III, s. 150、長谷部訳、青木版二〇一ページ)。一般に、自然的制約をうける原料を使用する工業生産の発展、その好況、不況は、かかる原料の生産、したがつてその価格変動によつて大きな影響をうけることを余儀なくされるが、当時イギリスの木綿工業は、この棉花事情によつて大きく左右された。さきの『報告書』のなかでこうした原料事情のため

に「木綿工業では以前から他のどの事業部門におけるよりも」より大きな、より頻繁な変動が生じたと述べているが、このあとの年月においても、のちに見るように木綿工業の景況はたえざる不安定性を示した。当時の産業循環を見る場合、この点はかなり注意を要する点と考えられる。⁸⁾

(8) 同じくこの第三「評論」より。——「一八四五年、一八四六年の馬鈴薯病の場合とまったく同じように、今年のはじめ以来、棉花の不作によつてブルジョアジーの間で一般的な驚愕が拡がっている。この驚愕は、一八五一年の棉花の収穫も一八五〇年のそれよりけつしてずっと多くはないだろうということがはつきりして以来、より一層いちじるしく強まった。以前の時期であれば大したことではなかったであろう不作も、今日のように木綿工業が拡張されているときにはきわめて重大であつて、すでにその活動の上に大きく阻止的作用を及ぼしている。ブルジョアジーは、かれらの全社会的秩序の礎柱(Grundpfeiler)の一つたる馬鈴薯が危険に類したという打撃的な発見からやつと立直つたところであつたが、いまやまた第二の礎柱である棉花が脅かされているのを見ている。ある一回の中途の棉花不作と第二の同様な見込だけですでに、繁栄の歓声のただ中に深刻な不安をひき起しえたとなれば、真の棉花不作の年が何年かつづくとときには、必然的に全文明社会は一時野蠻状態に引き戻されるであらう。金のまた鉄の時代はもうずっと前にすぎ去つた。その知識とその世界市場とその巨大な生産力とをもつ十九世紀にとつては、木綿時代(das baumwollene Zeitalter)を現出させることが取つておかれてある。これと同時にイギリスのブルジョアジーは、合衆国が、これまで破られたことのない棉花生産の独占によつてかれらにたいしてどのような支配権を振うかということを、以前よりも一層圧迫的に感ずることとなつた。かれらはただちに、この独占を破る運動に着手した。東インドのみでなく、ナタールやオーストラリア北部でも、また総じて氣候と環境とが棉花栽培を可能とする世界のどの部分でも、これはあらゆる手段をつくして促進されねばならないのである」(同上訳、二四七—八ページ、復刻版、S. 311)。

マルクス、エンゲルスは、イギリスの当時の経済情勢について以上のような考察を加えたのち、イギリスの経済情勢が大陸に及ぼす作用についてつぎのように述べ、そして前掲のように、こうした繁栄期には現実の革命は問題にならない、あらたな革命はあらたな恐慌の結果としてのみ可能なのである、という結論づけを与えているわけである。

「恐慌期が大陸ではイギリスよりも遅れてやってくるのと同様に、繁栄期もまたそうである。最初の過程はつねにイギリスではじまる。……ブルジョア社会がたえずくり返し経過する循環の種々の局面は、大陸では第二次的、第三次的形態をとってやってくる。」「というわけは」第一に、大陸は他のどの地方に向けてよりも比較にならぬほど多くをイギリスに輸出している。だがイギリスへの輸出はさらにイギリスの状態——とくに海外市場にたいする——にかかっている。つぎに、イギリスは大陸全体よりも比較にならぬほど多くを海外諸地方に輸出しているので、これらの諸国への大陸の輸出量は、つねにそのときどきのイギリスの海外輸出にかかっている。したがって、恐慌がまず大陸で革命を生み出すとしても、その基礎(Grund)は、それにもかかわらずつねにイギリスにある。ブルジョア機構の四肢の方がその心臓部よりも早く早く強力な発作を起さざるをえないのは当然である、というのは、後者では前者よりも調整の可能性がより大であるからである。他方、大陸の革命がイギリスに反作用する度合は、同時は、これらの革命がどの程度にブルジョアの生存諸関係を現実に問題にしているか、またはどの程度にその政治的組成にしか関係していないか、ということを示すバロメーターである」(同上訳、二五八ページ、復刻版、S. 317, [「内一三七」])。

三

さきにも一寸言及しておいたように、エンゲルス自身も後年、右の一八五〇年の『新ライン新聞—政治経済評論』の第三「評論」のところで以前の「幻想」と袂別したことを認め、これについて述べている。すなわちエンゲルスはその死去した年である一八九五年三月六日の日付をもつところの、マルクスの『フランスにおける階級闘争』(一八五〇年)への「序文(Einleitung)」のなかで、つぎのように述べている。——「……一八五〇年の春以来マルクスはふ

たたび経済研究の暇をえ、まず第一に最近十年間の経済史にとりかかった。これによって、かれがこれまで不十分な資料からなかば先験的に推論していた事柄が、事実そのものからかれに完全に明らかとなった。それは、一八四七年の世界商業恐慌が二月および三月革命の本来の母であったこと、そして一八四八年の中頃からしだいにふたたびはじまり、一八四九年と一八五〇年に全盛に達した産業上の繁栄が、力をあらたにしたヨーロッパの反動の蘇生力であったということである。これは決定的なことであった。最初の三論文（『新ライン新聞—政治経済評論』、ハンブルグ、一八五〇年、の一月、二月、三月冊に載せられたところの）のなかでは、革命のエネルギーがまもなくあらたに昂揚するだろうという期待がまだ貫ぬかれているが（durchgeht）、一八五〇年秋発行の最後の合併冊（五月—十月）の、マルクスと私とが書いた歴史的概観では、きつぱりとこうした幻想と手を切っている（bricht ein für allemal mit diesen Illusionen）。すなわち『あらたな革命はあらたな恐慌の結果としてのみ可能である。だがまたそれは後者と同じようにたしかである』と」（大月『選集』、第五卷、一五六—七ページ、改造社『全集』、第五卷、一〇ページ、K. Marx und F. Engels, Ausgewählte Schriften in zwei Bänden, Bd. I, Dietz, 1951, S. 106. K. Marx: Die Klassenkämpfe in Frankreich 1848 bis 1850, Bücherei des Marxismus-Leninismus, 1951, S. 7-8, 傍点—三密。本稿では以下、訳書としては大月『選集』の、原文としては Ausgewählte Schriften のページを記しておく）。

（9）上でエンゲルスが「最初の論文」と記しているのは、掲載号を「一月、二月、三月冊」と記していることから見て、この『フランスにおける階級闘争』のもとの連載論文である「一八四八—一八四九年」——これは一、二、三と三回にわたって第一冊、第二冊、第三冊に掲載された——を指しているものであらう。またつぎで「マルクスと私とが書いた歴史的概観」というのは、いうまでもなくさきの第三「評論」のことである。このようにエンゲルスがここで直接に挙げているのは連載論文「一八四八—一八四九年」であるが——その「序文」として書かれていることから当然でもあるが——、しかしここであ

ていることは同時に、第二、第四冊に掲載のさきの第一、第二「評論」にもそのまま妥当するものとして読むことができよう。そして、右の連載論文ではそのなかでとくに「革命のエネルギーがまもなくあらたに昂揚するだろうという期待」については書かれているわけではないのであつて、これがはつきり示されているのは、むしろ第一、第二「評論」においてなのである。

エンゲルスはこのあとでさらにつぎのように当時の状況を述べている。——「二月革命が勃発したとき、革命運動の諸条件と経過とについてのわれわれの考えにかんじていうと、われわれはすべて、従来の歴史的経験、ことにフランスのそれ（「いわゆるフランス大革命のこと」に、捉われていた。このフランスの歴史的経験こそまさに、一七八九年以来の全ヨーロッパの歴史を支配していたものであり、こんどもまたふたたび、一般的変革への信号がそこから出ていたものであったのである。かくて、パリで一八四八年二月に宣言された『社会』革命、プロレタリアートの革命の性質と進行とについてのわれわれの考えが、一七八九—一八三〇年のお手本についての記憶によってつよく色どられていたことは、いうまでもないことでありまた避けがたいことであった。かつそのうえ、パリの蜂起が反響して、ウィーン、ミラノ、ベルリンの勝利をえた蹶起が生じたとき、全ヨーロッパがロシアの国境まで運動のなかに捲込まれたとき、ついで六月にパリで、プロレタリアートとブルジョアジーとの間で支配権をめぐる最初の大戦闘が戦われたとき、かれらの階級の勝利でさえも万国のブルジョアジーをひどく震撼させ、そのためにまやかと覆えしたばかりの君主制的封建的反動の腕のなかにかれらがふたたび逃げ帰ったとき、われわれにとって当時の事情の下では、つぎのこととはなんら疑う余地がありえなかった。すなわち、大きな決定戦がはじまったこと、この決定戦はただ一度の、長くかつ変化の多い革命期で（in einer einzigen langen und wechselvollen Revolutionsperiode）戦つて結着をつけら

ねばならぬ、ということ、だがそれはプロレタリアートの終局の勝利をもつてのみ終りうるものであるということ、——これである。／われわれは一八四九年の敗北後は、国外の仮未来政府のまわりに集まった俗流民主主義「者」の幻想を、すこしも分ち持つてはいなかった。かれらは『人民』が『抑圧者』にたいして間もなく、きっぱりと決定的な勝利をうることを予期していたが、われわれは、『抑圧者』を排除したのち、まさにこの『人民』のなかに隠れている対立的な要素の間で、長い闘争が行われることを予期していた。俗流民主主義「者」は今日か明日にもあらたな勃発が生じることを期待していたが、われわれはすでに一八五〇年の秋に、すくなくとも革命期の第一段階(der erste Abschnitt)は終りをつげたのであって、あらたな経済的世界恐慌の勃発にいたるまではなにことも期待できない、ということを明らかにした。そのため、われわれはまた、右の人々から革命の裏切者(Verräter)として絶交されてしまった」(同上訳、一五八—九ページ、a. a. O. S. 107-8. 傍点および「」内—三宅)。

エンゲルスはこのように、マルクスおよび自分が一八四八—五〇年当時、革命の進行にたいしてどう考えていたかという、その考え方の内幕を打ち明けている。右の記述を十分に理解しうるものとするには、この兩人が当時の革命の性質についてどう考えていたか、ならびにそのフランス革命観について立入って言及しなくてはならないが、それは本稿としてはあまり傍道に入ることになろう。ここではただ、さきの第一、第二「評論」における兩人の見方の基礎にあったものについて、また第三「評論」のもっていた重要性について、エンゲルス自身が伝えている言葉として掲げておくにとどめる。なお、「一八四九年の敗北後」においても、一八五〇年の春頃には、マルクス、エンゲルスも「革命のエネルギーがまもなくあらたに昂揚するだろうという期待」をまだ抱いていたことは、右のすぐ前で——前掲のように——エンゲルス自身がそう記していることであり、またさきに第一、第二「評論」で見たとおりであ

る。

(10) 一八四九年の秋から「共産主義者同盟 (Bund der Kommunisten)」の以前の中央委員たちはふたたびロンドンに集まり、組織の再建が計られた。——マルクス、エンゲルス、シャッペル (K. Schapper)、ウィリッヒ (A. Willich)、ウォルフ (W. Wolf) 等。中央委員会が分裂したのは一八五〇年九月十五日であった。リヤザノフは『マルクスとエンゲルス』(英訳 Marx and Engels, 1927, 改造社『全集』第一巻附録、堺利彦訳、岩波文庫版、長谷部文雄訳、『マルクス・エンゲルス伝』)のなかでこのように述べている。——意見の相違が生じたさい、マルクスの見解にたいして「とくに不賛成を唱えたのは、経済学に十分な基礎を持っていないで、少数の大胆な個人の革命的創意に過度の重要性を置く人たちであった。……これらの主張するところによれば、必要なのはただ一定額の資金と幾人かの勇敢な人物とであった。……ついに分裂が生じ、『共産主義者同盟』はマルクス、エンゲルス派とウィリッヒ、シャッペル派とに分かれた」(改造社『全集』版訳、八四六ページ、長谷部訳、一〇四ページ)。そのあとこうした分裂に乗じて、翌一八五一年五月にケルンでの検挙が起り、一八五二年十月―十一月の裁判が終ったのち、マルクスの提議によつて「共産主義者同盟」は正式に解散した。——「ケルンの裁判をもつてドイツの共産主義的労働運動の第一期は終りをつげた。判決のすぐあと、われわれはわが同盟を解散した」(エンゲルス「共産主義者同盟の歴史」——マルクス『ケルンでの共産主義者裁判の曝露』(一八五二年)の第三版である一八八五年版の「序文」——、改造社『全集』第五巻、三四二ページ、大月『選集』第二巻、四五二ページ、Ausgewählte Schriften, Bd. I, S. 331, K. Marx; Enthüllungen über den Kommunistenprozeß zu Köln, Bucherei des Marxismus-Leninismus, 1952, S. 30)。このウィリッヒ、シャッペルとの「分裂」については、右のエンゲルスの「歴史」『全集』版、三四一ページ、『選集』版、四四九―五〇二ページ、Ausgewählte Schriften, S. 329-30, Enthüllungen, S. 27-9)のほか、マルクス『曝露』、改造社『全集』第五巻、三四六―八ページ、三九二―四四四ページ(ウィリッヒ、シャッペル派)、四一三―四四四ページ(一八七五年版へのマルクスの跋)参照(大月『選集』では第四巻、四四三―五二四ページ、五一二―四四四ページ、五四四―五二四、Enthüllungen, S. 38-40, S. 94-6, S. 121)。なお、大月『選集』第四巻には『ニューヨーク・トリビュン』所載のエンゲルスの好論文「最近のケルンの裁判」——一八五二年十一月十六日付エンゲルス宛のマルクスの手紙参照——が収められている(四三〇―八ページ、この訳はロシア語版によつたものであらう)。

(11) 周知のようにマルクスは一八五九年の著書『経済学批判』の「序言」のなかで、中断していた経済学の研究を一八五〇年からロンドンでふたたびはじめたと記しているさい、「まったくはじめから研究をやり直し、このあたらしい材料によって批判的に徹底的な研究をしよう、と決心した」といつているが、この期の抜書帳 (Excerptheft) は、『グランドリッセ』末尾に附されている編者の手になる文献目録で見ると、さきと符節を合して、その第一冊 (Heft) は「ほぼ一八五〇年九月—十月」からはじまっている。叙上の点を念頭に置いて見ると、一八五〇年秋がマルクスにとって大きな転換点であったことをここにも窺うことができる。

ところで、いまこの『フランスにおける階級闘争』へのエンゲルスの「序文」をここに掲げておくのは、以上のよううに一八五〇年の秋、第三「評論」のところで、恐慌—経済情勢についての、したがってまた革命についての見方が変わってきたことを、エンゲルス自身の口を通じてくり返し見ておこう、という趣旨ばかりではない。ついでエンゲルスはさらにつぎのように述べているのであって、この点は、この一八五〇年秋以後長い間のマルクス、エンゲルスの見解にたいする後年におけるエンゲルスの反省を示しているものとして、大いに注目されるべきものであり、本稿でこのあとずつと跡づけてゆく兩人の見解を見る上に、あらかじめ念頭に置かれてしかるべきものと思われるからである。すなわちエンゲルスは右に語をついでつぎのように述べている。——「しかしながら歴史は、われわれをも誤りとし、われわれの当時の見解が一つの幻想 (eine Illusion) たることを暴露した。歴史はさらに一歩進めて、われわれの当時の誤謬を粉碎したばかりでなく、プロレタリアートが闘争すべき諸条件をすっかり変革してしまった (hat ... total umgewälzt)」。一八四八年の闘争方法は、今日あらゆる点で時代遅れとなつてしまつてゐる (ist ... veraltet)。そしてこのことは、この機会により立入つて研究されるに値する点である」(大月『選集』、第五卷、一六〇ページ、a. a. o. s. 108)。

ここで「われわれの当時の見解」といつているのは、さきの一八五〇年秋に到達した考え、すなわちこのすぐ前でも「あらたな経済的世界恐慌の勃発にいたるまではなにごとく期待できない」と記しているところの、さきの第三「評論」での結論的見解、を指していると読むほかないであろう。つまり、これまでくり返し見てきた「あらたな革命はあらたな恐慌の結果としてのみ可能である。だがまたそれは後者と同じようにたしかである」ということに要約される見解にほかならない、と。

そして右では二つのことが、すなわち、一つは「歴史はわれわれをも誤りとし、われわれの当時の見解が一つの幻想たることを曝露した」ということ、一つは「歴史はさらに一步進めて……プロレタリアートが闘争すべき諸条件をすっかり変革してしまった」ということがいわれているわけであるが、この前の方の点について、エンゲルスはさらにつきのように述べている。——「歴史はわれわれならびにわれわれと同じように考えていたすべての人々を、誤りとした。歴史は、大陸における経済的發展の狀態が、当時まだどうてい、資本制生産を撤廃しうるまでに成熟していなかったことを明らかにした。歴史は、かの経済上の革命、すなわち、一八四八年以来全大陸を捉え、フランス、オーストリー、ハンガリー、ポーランド、および最近ではロシアに、はじめて現実に大産業を植えつけ、ドイツをまさに第一流の工業国たらしめたところの、かの経済上の革命によってこのことを証明した。——すべてこれらのことは、資本制的な基礎の上で行われたのであって、したがって一八四八年にはかかる基礎はまだきわめて拡張能力があったわけである。だがまたまさにこうした産業革命こそ、いたるところで階級関係をはじめてはつきりさせたのであって、この産業革命が、マニユファクチュア期から——また東欧ではツンプトの手工業からさえも——伝わってきた多くの中間存在物を除去し、現実のブルジョアシーと現実の大工業的プロレタリアートとを生み出し、かれらを社会發達の

前面に押し出したのである。だがまたこのことによって、一八四八年にはイギリス以外ではパリおよびせいぜい二三の大きな工業中心地に存したにすぎなかったこれら二大階級間の闘争が、はじめて全ヨーロッパに拡大させられることとなり、また一八四八年にはまだ思いも及ばなかったほどの強さをうるにいたった。……「しかも今日では当時とちがつて、当争の窺極目的を明確にしているマルクスの理論があり、また、数、組織、規律、勝利への確信をもつ社会主義者の大國際軍がある、と述べ」……こうした強力なプロレタリアート軍でさえも、いまだその目標に達してはなく、大きな一打撃をもって勝利を獲得するにははるかに遠く、苛酷執拗な闘争によって一陣地から一陣地へと徐々に前進してゆかねばならないとすれば、このことは、いかに一八四八年において、かんたんな奇襲によって（durch einfache Ueberumpelung）社会的変革を成就することが不可能なことであつたかを、きわめてはつきりと証明するものである」（同上訳、一六二—三ページ、a. a. O. S. 110-1, 傍点—三宅）。

「共産主義者同盟」のすくなくとも「マルクス派」の見解は、「かんたんな奇襲によって社会的変革を成就する」ということではなかった、マルクスはすくなくともドイツについてはドイツ・プロレタリアートの未発達を指摘し、来るべき革命の性質を一举にしてプロレタリアートが政權を掌握するものとはけつして考えていなかった、と見受けられるのであるが——このことはさきのこの「序文」でのエンゲルスの記述からも窺われうるであろう——、しかし一八五〇年秋以後においても、一八五七年恐慌の到来にいたるまでをとってみても、「革命」勃発に大きな——過大な——期待を寄せていたことは、否定できない。エンゲルスがここで、「歴史はわれわれをも誤りとした」といつているのは、そうした見透しがお甘かつたことがその後の現実において明らかにされている、ということ卒直に認め、その上に立つて今後の運動方法を再検討する要があるということであろう。

なお、さきのいま一つの点、「歴史はプロレタリアートが闘争すべき諸条件をすっかり変革してしまった」ということの方は、この「序文」においてこのあと詳細に述べられていることであり、そこでエンゲルスは、「旧式な反乱、一八四八年まではいたるところで最後の勝敗を決定したバリケードでの市街戦 (Straßenkampf mit Barrikaden) は、いちじるしく時代遅れとなってしまった (war... veraltet)」(同上訳、一六九ページ、a. a. O. S. 115) と「軍事力の発達が軍隊側をずっと有利に、反乱側をずっと不利にしたことを指摘し、「将来の市街戦は、こうした状況の不利が他の要素によつて埋め合わせられたときにのみ、勝利をうることができる」(同上訳、一七三ページ、a. a. O. S. 118)、そして他方、「普通選挙権の効果的な利用によつて、プロレタリアートのまったくあらたな闘争方法が作用しはじめ、かつそれは急速に発達をとげた」(同上訳、一六九ページ、a. a. O. S. 115) ことを指摘しているわけである。この点は問題自身としてはきわめて重要であるが、本稿としては傍道にあまり入るので、立入らない。¹²⁾

(12) ここではただ一つ、この「序文」の例の改変の件——これは直接には、上の第一の点にかんしてではなく第二の「闘争方法」の点にかんしてのことであるが——についてすこし納得のゆかないことがあるので、そのことを備忘的に記しておく。この「序文」はその後ベルンシュタインによつてかれの修正主義の基礎づけのために利用されたが、リヤザノフはドイツ社会民主党の文庫のなかからエンゲルスの原稿を見つけ出し、これについて Unter dem Banner des Marxismus (ドイツ語合冊版、1. Jahrgang, 1925-26, S. 160-5) に「マルクスの『フランスにおける階級闘争、一八四八—一八五〇年』へのエンゲルスの序文」なる考証論文を書いた。以来、改変の件はこの考証論文によつて解決済と見られているわけであるが、このリヤザノフの考証のなかには一点明確さを欠く書き方をしているところがある。そしてたとえば後年の「上掲 Ausgewählte Schriften, Bd. I」においてもこの「序文」掲載の当該箇所編集者の脚註が入っているが、そこでも右の点が同様な不明確さで、というよりも誤りに発展させられているのである。事は改変の件の考証としてはもともと本質的なところであるので、以下順

を追って述べておく。

まずリヤザノフの右論文の筋を記しておこう（「」内は筆者の補註である）。リヤザノフはつぎのように述べている。

エンゲルスの右「序文」はベルンシュタインによつて「社会主義の諸前提」のなかでその修正主義のために利用されたが、これにたいしてK・カウツキーはただちに『ノイエ・ツァイト』（一八九八年）上で抗議し、「そのさいカウツキーはつぎのことをつけ加えた、——エンゲルスの真のテキストは公表された文体とは若干相違があるはずである。エンゲルスの序文のなかで革命的な世界観が、必要な明確さと規定性をもつて示されていないとすれば、『それはエンゲルスの責任ではなく、結びを——あまりに革命的であるから——取除くことをかれに強要したドイツの友人たちの責任である』云々」。そしてカウツキーは、エンゲルスの遺稿類はベルンシュタインが持つているのであるから、そのなかから「抹消されている結びのついている序文の原稿」を見つけ出してこの「結び」を公表することをベルンシュタインに要求した。だがベルンシュタインは——「おそらく、序文のオリジナルを見出すことができなかったからであろう」か——これに応ぜず、しかもそれにもかかわらず前掲書のその後の版でも他の論文でも同じことをくり返した。だかエンゲルス自身その存命中、かれの序文の修正主義的解釈にたいして強く抗議していたのであつて、ラファルグは一八九五年四月三日付のかれ宛のつぎのようなエンゲルスの手紙を公表した。「だれかが（X）〔W・リープクネヒトのこと〕私にたいして悪い悪戯をした。かれは、一八四八—一八五〇年のフランスにかんするマルクスの論文への私の序文のなから、いかなる場合にも平和的な、強力を嫌悪する戦術を擁護するのにかれが役立つと思つたところを引抜いた（...alles entnommen, was...）〔こういうところだけをとり出して掲げた、という意味〕。こうした戦術を説法することは、数年来、とくに目下——ベルリンで例外法〔あらたな社会主義者法のこと、後述〕の準備がなされているので——かれの気に入つてゐることなのである。だが私がこうした戦術を勧めているのは、ただ現時のドイツにたいしてであつて、しかも本質的な制限を附してのことなのである。フランス、ベルギー、イタリー、オーストリアでは、こうした戦術に従ふことはできないし、またドイツでさえ、明日にも一般的には適用しえないことが証明されるかもしれないのである」〔リヤザノフはこの手紙のフランス語原文を一九〇〇年十一月二十四日の *Le Socialiste* から採つて併せ掲げているが、この手紙は同年の『ノイエ・ツァイト』にも掲載されたらしく、改造社『全集』第二十二巻所収の「ラファルグ宛の手紙」はこれを底本としている。なお、この手紙および後出の一八九五年四月一日付カウツキー宛のエンゲルスの手紙は *Marx-Engels, Ausgewählte Briefe, Dietz, 1953, S. 566-7* に収められてゐる〕。また同様な証拠を、『ノイエ・ツァイト』（一九〇八年）

に掲げられたカウツキーの論文のなかに見出すことができる。カウツキーはエンゲルスにたいして、右「序文」を、『フランスにおける階級闘争』の新版に附されて出る前にそれだけとり出して『ノイエ・ツァイト』に載せる許可を求めたが、エンゲルスはこれを「喜んで」承知したさい、つぎのことを述べている、「私のテキストは、社会主義者法案——ベルリンのわれわれの友人たちがこれを怖れ氣使っているために若干そこなわれた。私は事情によつてはかれらを考慮に入れなければならなかったのです (Mein Text hat einiges gelitten unter Umstürzvorlagen-furchtsamlichen Bedenken unserer Berliner Freunde, denen ich unter den Umständen wohl Rechnung tragen mußte)」〔一八九五年三月二十五日付カウツキー宛の手紙。岡崎次郎訳『エンゲルスのカウツキーへの手紙』、岩波文庫、三七二ページ。なお、この手紙はさきの *Ausgewählte Briefe* には収められていない——同年四月一日付カウツキー宛の手紙、三日付ラファルグ宛の手紙と一体をなして扱われねばならぬものであるのかかわらず——〕。あたらしい反社会主義者法案は一八九四年十二月五日に国会に上提され、一八九五年一月十四日委員会付託とされた。情勢はきわめて深刻であつて、エンゲルスが若干の言い廻しを弱めることに同意したのは、ただこのことがあつたからにはかならない。しかし『フォルヴェルツ (Vorwärts)』〔ドイツ社会民主党の中央機関紙〕は右委員会での論議に有利な影響を及ぼすために、若干の箇所を都合のいいように集成して發表したので、エンゲルスの怒りは心頭に達した。一八九五年四月一日付カウツキー宛の手紙のなかで、エンゲルスはつぎのように書いてゐる。——「驚いたことには、今日『フォルヴェルツ』に、私にあらかじめ通知なしに私の序文からの抜き書 (einen Auszug aus meiner Einleitung) が印刷され、しかも私がいかなるときでも合法性の平和的崇拜者として立つたかのように (als friedfertiger Anhänger der Gesetzlichkeit quand même dastehende) 適当に形を整えられているのを、見た。だから私はますます〔前の三月二十五日付のカウツキー宛の手紙で『ノイエ・ツァイト』に載せることを「喜んで」承諾したが、上のようなことがあつたのでますます、という意味であろう。ちなみに、『ノイエ・ツァイト』はカウツキーが編集していた〕、序文が『ノイエ・ツァイト』に短縮されないで出て、この不名着な印象が消されることを望みたゞ (Un so mehr wünsche ich, daß die Einleitung in der Neuen Zeit ungekürzt erschiene (unz. *Ausgewählte Briefe* 及び——後掲 *Ausgewählte Schriften* ①) ① 用文でも同様——) のやうになつてゐる。Um so lieber ist es mir, daß das Ganze jetzt in der „N[eu]en Z[eit]“ erscheint)」。リーフクネヒトにはこれについてはいささか私の意見を言つておこつ、また、だれであろうと、私の意見を歪曲する〔——「しかも私に一言の断わりもなしに」——(*Ausgewählte Briefe*)〕かかる機会をかれに与えた者たちにも言つて

おこう」〔岡崎訳、前掲書、三七六ページ〕。

リヤザノフはこのように述べてき、そして右の手紙の引用にすぐつづけて、つぎのように記している、——「以来三十年を経過したが、しかしまだ『階級闘争』への序文は……その最初の文体で (in ihrer ursprünglichen Fassung) 発表されてはいない」と。そして、ベルンシュタインはエンゲルスの手稿を発見することができなかったのであるが、「幸いにして私は、ベルンシュタインがドイツ社会民主党文庫に数日前引渡した書類のなかから、それを見出した」、オリジナル・テキストを公表されたテキストとくらべてみると、結びの部分だけが削られたのであらうというカウツキーの想像はまちがっていた、と。そしてリヤザノフは、この原稿をベーベルの序文が附されている一九一一年版と対照して、終りの方の一八ページから二二ページの間に抹消された箇所がいくつかあるとして、以下で、この抹消部分をここにはじめて公表したのである〔この抹消部分は改造社『全集』ではこのリヤザノフの公表にもとづいて第二十五巻に抹消部分だけを追加的に訳出しており、また大月『選集』第五巻では「序文」の訳のなかに傍点を附してこの箇所を示している、——もつとも傍点の打ち洩れが三カ所ほどある——。なお上でいつているあたらしい社会主義者法案 (いわゆる *Unsturzvorlage*) は、ビスマルクのいわゆる社会主義鎮圧法が一八九〇年国会で廃止され、以来ドイツ社会民主党は大いに活動の自由をえたが、これにたいしてふたたびこれを拘束しようとして一八九四年末に国会に提出されたものであった。この法案は、結局一八九五年五月十一日に否決された」。

さて、以上リヤザノフの考証論文の筋道を記しておいたが、不審に感ぜられるのはつぎの点である。すなわち、右に挙げられていて一八九五年四月三日付ラファルグ宛の手紙、四月一日付カウツキー宛の手紙を見ても、「いかなるときでも合法性の平和的崇拜者として立つかのよう」に「その『序文』を歪めて発表したことにたいしてエンゲルスが大いに憤慨し、みずから、その『序文』はそう解釈されるべきでないということを明示していることはたしかであるが、しかし、そこでエンゲルスが序文が「短縮されないで」出ることを望んでいるその望みは、当時そのとおりにされたのであって、リヤザノフが「原稿」と対照している序文もまさにその短縮されないで出されたものであるはず、と思われることである。エンゲルスの原稿はドイツ社会民主党幹部によって若干の削除が希望され、この削除をエンゲルスは承諾したのであって、そのことは右の三月二十五日付カウツキー宛の手紙からも知ることができる。『ノイエ・ツァイト』に載せることを「喜んで」承知しているのも、この訂正ずみのものである (なお、カウツキー宛のエンゲルスの手紙はその後カウツキー自身によってまとめ、K. Kautsky; Aus der Frühzeit des Marxismus, Engels' Briefwechsel mit Kautsky, 1935. のなかで発表された。岡崎訳前掲書はこの

なかからの訳であるが、それによるとこの三月二十五日付の手紙では上掲の文句の前に、「君の電報に早速御返事する、『喜んで』。テキストは校正刷に帯封をして出した」とある。ところが『フォルヴェルツ』でリープクネヒトがそれからの「抜き書」を発表した。四月一日、三日の手紙はこの「抜き書」にたいして憤慨しているのであり、カウツキー宛に、「だからまずまず『ノイエ・ツァイト』に全文が——「抜き書」でなく、エンゲルスの見た削除済みの「校正刷」のまま——出されることを「望みたい」といつているのである。

リヤザノフはドイツ社会民主党幹部がエンゲルスに「序文」の筆鋒を緩和することを求め、エンゲルスがこれを承諾したことを知っていたはずであることは、右の考証文でカウツキーのいつていることを引いていることから当然に推測されうが、さらにかれば、これ以前に書いた前出『マルクスとエンゲルス』（この序文の日付は一九二三年四月）のなかではこれについてつぎのように述べているほどである、——「エンゲルスの生涯の終り頃には、かようにかれが諸国の主要党派の首脳者のみとたえず連絡していたことは、多少の矛盾を生じるにいたった。かくしてかれは、農民問題にかんするフランスのマルクス主義者たちの逆上にたいしてはただちに反対して綱領のプロレタリア的性質を擁護したが、一方、ドイツの同志たちの前には屈服した。このドイツの同志たちは、社会主義者弾圧法の復活を怖れて、マルクスの研究『フランスにおける階級闘争』——それは仮借なき階級闘争および無産者独裁という觀念の立派な適用である——にたいするエンゲルスの序文の筆鋒を和げるように説き勧めたのである」（前掲長谷部訳、二二一ページ）。

ところがかれは、右に見たように、「私はまずまず、序文が『ノイエ・ツァイト』に短縮されないで出て、この不著名な印象が消されることを望みたい」といつている四月一日付カウツキー宛の手紙を掲げたのち、これにすぐつづけて、「以来三十年を経過したが、しかしまだ……序文は……その最初の文体で発表されていない」といつているのである。これは普通に読めば、「序文」を「短縮されないで」出すことがまだ果されていない、と解されるはかないであらう。リヤザノフはあるいは、「最初の文体で」といつていることで、「短縮されないで」では発表されたが「最初の文体で」ではないといおうとしていたのかもしれないが、このところの叙述の仕方ではそう解され難い。あるいはまた、リヤザノフは、「短縮されないで」とエンゲルスがここでいつているのは、かれが一応納得して承諾した削除をまた元に戻して、という意味だと解したのかもしれない。しかしそれでは、三月二十五日付の手紙と話しが合わなくなるし、また、もしエンゲルスが当時元に戻すべきだと考えたならば、はつきりそう書くはずであらう。（ドイツの印刷所の慣行や削除の了解を求めた順序がどうであつたかよくは分らな

いが、エンゲルスの「原稿」——リヤザノフの見ていた——に抹消線が入っているところから見ても、エンゲルスが受取った「校正刷」ではすでに抹削部分は印刷されていなかったはずであり、かれはこれを校正して「帯封をして」ドイツに送ったのであるから、「原稿」は——つまり「最初の文様」は——このときはエンゲルスの手元に止まり、ドイツには削除済みの校正刷しかないはずである。したがって、ふたたび「原稿」を送らないでカウツキーにもとの原稿どおり印刷することを求めるはずがないであろう。また、「原稿」がこのときエンゲルスの手元に戻っていたからこそ、エンゲルスのその他の遺稿とともにベルンシュタインが引継ぎ、これがドイツ社会民主党文庫に入ったわけであろう、と考えられる。

右の点はリヤザノフの考証論文において、考証上もつとも本質にかかわる欠陥をなしているものと私には考えられる。内容的にいうと、当時『ノイエ・ツァイト』に掲載され、また単行本『フランスにおける階級闘争』に附された「序文」は、けつして、「いかなる場合にも平和的な、強力を嫌悪する戦術を擁護するのに役立つところを引抜いた」ものではなく、「いかなるときでも合法性の平和的崇拜者として立つかのように適当に形を整えられている」ものではないのである。すくなくともエンゲルスはこの「序文」にたいしてそう考えていなかったことになる（そもそも、かれ自身が削ることを承知した「序文」がその形で発表されたことにはたいして、右のように憤慨したというように解することは、考えるほどもなくナンセンスなことであろう）。したがって、もし発表されていた「序文」をかかるとのみのみ解するならば、これはまた逆にエンゲルスの真意が「そこなわれた」ことになる、といわれねばならない。全体として、エンゲルスがこのとき、とくにこの本の序文として、なぜこういう序文を書くかと考えたか——「この機会により立入って研究されるに値する」として——、ということが正しく把握されねばならないのであって、一方は修正主義を、他方は強力革命を、それぞれ一面的に弁護するために自己に有利な解釈を押しつけることは、ともに解釈の科学性を導ぶ所以ではなく、ともに歪曲とされねばならない。

ところで、リヤザノフの考証論文では事態はさきのごとくであるが、後年の、つまり現在の解説では、これがつぎのように引きつがれ、発展させられている。たとえば *Ausgewählte Schriften* の編集者脚註(ディーツ版のこの二巻選集はモスコウの M・E・L 研究所、一九五〇年刊の二巻選集と同じものである。また『階級闘争』の *Bücher des Marxismus-Leninismus* 版も同じくこの二巻選集に拠っている)で「つぎのように記されている (Bd. I, S.104-5)。すなわち、「エンゲルスのこの序文は、当時ドイツ社会民主党の日和見主義的指導部によって悪く歪曲された」として、リープクネヒトが『フォルヴェルツ』に勝手に抜き出した一連の抜き書を発表したことを記し、前掲の一八九五年四月三日付ラファル

グ宛のエンゲルスの手紙ならびに同年四月一日付のカウツキー宛の手紙の一部を掲げているのであるが、そこで、エンゲルスがカウツキー宛に「だからますます、全文がいま『ノイエ・ツァイト』に出て、この不名誉な印象が消されることが私にとって好ましい」と書いている文を引き、すぐこれにつづけてこう述べている、「しかし『ノイエ・ツァイト』にも一八九五年の単行本のなかでも、この序文は完全には (vollständig) 発表されなかった。ドイツ社会民主党指導部はエンゲルスに宛て、ドイツにおけるあたらしい社会主義者法の危険について述べ、力を込めて要請したので、エンゲルスは序文のうち政治的にもっとも尖鋭的な箇所若干——そこではブルジョアジーにたいするプロレタリアートの切迫しつつある武装闘争について (von bevorstehenden bewaffneten Kampf) 述べられている [! ?] ——を削ることを強いられた。」ドイツ社会民主党の指導部——その手中にマルクス・エンゲルス文庫があった——はエンゲルスの論文の短縮されたテキストをかれらの日和見主義的政策の基礎づけるために利用しようとしたのであって、そのためかれらはこれを一度も完全に発表しなかったのである。／＼エンゲルスの完全なテキストははじめてソヴィエト同盟において発表された」(傍点および「内三宅」と。この書き方は、エンゲルスがカウツキーに「全文」を発表することを求めたが、しかしそれは実行されなかった、というようにしか解されないであろう。しかもドイツ社会民主党の要請ということがそのあとに出てくるので、あたかも「全文」を発表してはいないというエンゲルスの要求にたいして、ドイツ社会民主党がこれを抑えることを強いた、というような感を与える説明の仕方になっている(ついでながら、ここではもはや「裏切者」リヤザノフの名は隠されて「ソヴィエト同盟」とされていることが注意をひく)。

現行『フランスにおける階級闘争』への「序文」に附されている註が右のように読み取られることは、ひとり筆者の眼にとつてのみでない、つまり曲解ではない、ということをはたしかめておくために、一例として、邦訳大月書店刊『選集』に附されている「解説」での記述——これはおそらく右のモスコウの M・E・L 研究所の編集者註を見て書かれたものと思われるので——を掲げておこう。そこではこう「解説」されている、——「本序文はかつてドイツ社会民主党指導者の手でひどく歪曲されて発表された。『なにがなんでも平和と暴力の嫌悪との戦術を擁護するのにやくだつ』部分だけをとりてて発表し、『ノイエ・ツァイト』のそれも、一八九五年版の単行本も、そのままの形であった」云々(「マルクス・エンゲルス選集月報」、第5号、一九五四・一・一五、二ページ下段)。また、さきのリヤザノフの考証論文が誤解を招く——リヤザノフ自身が誤解していたのではないとすれば——書き方となっている、と映じるのもひとり筆者の眼にとつてのみではないであろうことを示しておく

ために、一例として、これに拠つて書かれたと見られるところの改造社刊『全集』での「解説」を併せ掲げておこう、――
「……不幸なことには、この序文の全部がそのままには発表されなかった。……ドイツ社会民主党のある人々は、エンゲルスの緒言の言いまわしを弱め、所々これを削除して発表した〔「解説」氏はとくに『フォルヴェルツ』に掲載された「抜き書」を指してこういつているのではなく、当時発表された序文についてこう記しているわけである〕。改良主義的にすら解釈され得るような、この訂正仕方そのものに対して、エンゲルスは屢々激しい不満の意を言明していた〔ところがエンゲルスのこの「激しい不満」は『フォルヴェルツ』での「抜き書」にたいするものであつて、その後発表された序文にたいするものではない〕。エンゲルスの死後エドウアルト・ベルンシュタインが、この発表された緒言を援用して、彼の改良主義を擁護せんとした」云々（改造社『全集』、第十五巻、五一三ページ、ハ）内―三宅）。

おわりに、リヤザノフ自身が誤解していたのでなかったとすれば、それにもかかわらずなぜあした説明の仕方を選ったのであろうか、ということが疑問として残るのであるが、そしてこれには一、二の理由も想像されるのであるが、この点は所詮想像にとどまるので、以上にとどめおく。（なお以上の註記は、『フォルヴェルツ』にリープクネヒトが掲載した「抜き書」の文章を併せ見るならば、エンゲルスの叙上の憤慨の意味をより明らかに知ることができるわけであるが、遺憾ながら筆者はまだこれに接するにいたっていない。）